



他者の表情とその割合が対象の選好判断に及ぼす影響

複数の表情が混在する場合での検討



○ 布井雅人（聖泉大学人間学部）・吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター）

nunoi-m@seisen.ac.jp

Introduction

対呈示される**他者の人数とその表情**によって、ターゲットの選好判断は変化する（布井・吉川, 2016: 心理学研究）

好意度上昇
喜び表情の割合が影響
一場面内の半数以上が
喜び表情の場合に好意度上昇

好意度低下
嫌悪表情の有無が影響
一場面内に1人でも
嫌悪表情があると好意度低下

他者の人数と表情が、ターゲットの評価を示す**文脈情報**として解釈される

⇒ 自身の評価時にその情報を利用した可能性

- ・ 喜び表情：ターゲットが良いものである ⇒ 良い評価は慎重に利用
- ・ 嫌悪表情：ターゲットが悪いものである ⇒ 悪い評価には敏感に反応し、利用

※ただし、一場面内に存在していたのは喜び表情が嫌悪表情のいずれかのみ

喜び表情と嫌悪表情が同時に存在する場合
各表情の数が選好判断にどのような影響を及ぼすのか？

Method

参加者：大学生 32 名（男女同数）

ターゲット刺激：無意味図形 80 枚（遠藤他, 2003）

顔刺激：真顔・喜び・嫌悪（日本人女性 4 名分）

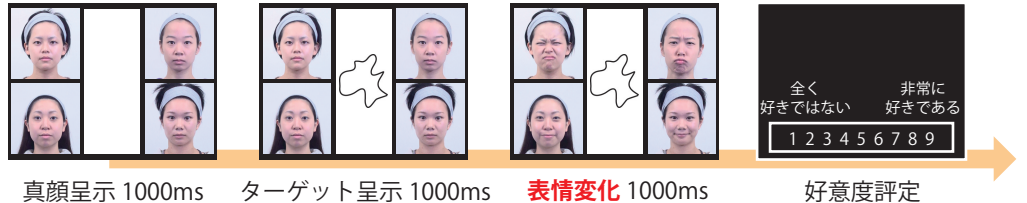


ベースライン評価 (80 試行)

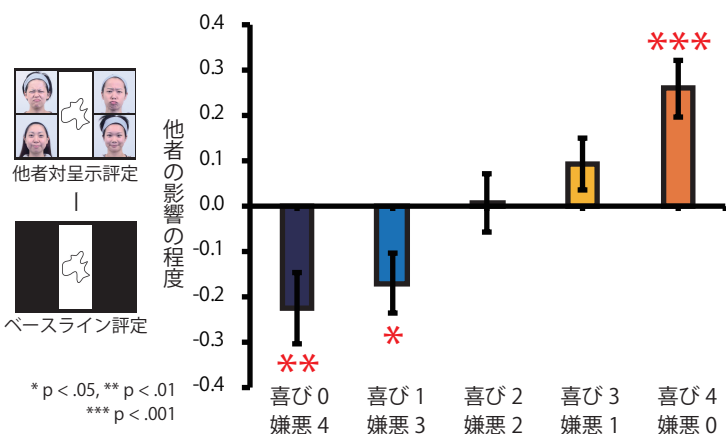


1: 全く好きではない～9: 非常に好きである

他者対呈示評価 (80 試行)



Result & Discussion



嫌悪表情は多数派であれば、喜び表情が存在しても好意度の低下をもたらす

・ 少数の喜び表情では、多数派である嫌悪表情の影響を覆すことは出来ない

喜び表情が半数を超えていても、嫌悪表情が存在すると好意度は上昇しない

・ 嫌悪表情の影響が、喜び表情による好意度の上昇を妨害している可能性

嫌悪表情の影響は、喜び表情の影響よりも強い

嫌悪表情によってもたらされる悪い評価に敏感に反応

ただし…

一場面に喜び・嫌悪の2つの情報が混在する場合は、どちらの情報の影響を受けやすいかの個人差が大きくなる

- ・ 特に、嫌悪表情が多数派でない場合には、個人差が大きい
- ・ 嫌悪表情が存在している場合でも、喜び表情の影響を強く受け、好意度の上昇が生じる人も存在する

各条件における他者の影響の相関

	喜び0・嫌悪4	喜び1・嫌悪3	喜び2・嫌悪2	喜び3・嫌悪1
喜び0・嫌悪4	-			
喜び1・嫌悪3	.698 **	-		
喜び2・嫌悪2	.390 *	.631 **	-	
喜び3・嫌悪1	-.075	.246	.240	-
喜び4・嫌悪0	-.399 *	.017	.098	.461 **

布井 雅人・吉川 左紀子 (2016). 表情の快・不快情報が選好判断に及ぼす影響——絶対数と割合の効果——. 心理学研究, 87, 364-373

他者の影響の程度の参加者別データ